責任帰属に及ぼす道徳基盤と公正世界信念の影響

Effects of Moral Foundations and Belief in a Just World on Responsibility Attribution

北村　英哉
Hideya KITAMURA

本論文では規範を逸脱した他者への責任帰属を取り上げる。ここでは、加害者と被害者が存在する状況において、規範を逸脱して被害を与えた事由について、どの程度加害者の責任を問うか、どういった場合に加害者の責任を和らげたり、軽減したりするかのメカニズムのひとつを検討する。人が他者に責任を問い、責任の程度を推定するプロセスを責任帰属という。制裁は本来もっぱら法に基づくが、現実世界を生きる人々はしばしば言論的に加害者を責めるなどいわゆる社会的制裁を科し、加害者をとりまく世界全体によって罰を構成するという素朴信念に基づいて行動しがちである。

ここで、こうした責任帰属に影響をもつ公正世界観について説明する。公正世界観とは、人はその行いにふさわしい成果をこの世界では与えられるものであるとの信念であり、よい行いをする者は報われ、悪い行いをする者には罰がくだると素朴に考える信念のことである。Lerner（1980）は、人が理不尽に被害を被った他者の実例に接すると、公正世界観が脅かされてしまうために、しばしば被害者の落ち度などを取り上げて拡大し、被害者が被害に遭った現在の現実の状況に見合った過去の経緯（悪い行い）を有するものと想像し、自身のなかで公正世界観が傷つかないように調整を行ってしまうからくりを実験によって確証した。これが被害者バッシングと呼ばれる被害者非難（victim criticism）のメカニズムである。

Callan, Sutton, & Dovale（2010）の実験では、ウソをついた後に交通事故でけがをするシナリオを読んだ実験参加者はとりわけ認知負荷のあるときには公正世界信念（この場合は内在公正世界信念）に基づき、ウソをつくという不道徳な行為を行ったことが事故の原因として影響していると推定をしがちとなった。悪い行いが悪い結果を生むものと理解された。この実験は原因の推定であるが、責任帰属においてもこうした不道徳行動など普段の行動に行為者の落ち度が見られた場合には内的帰属が強められ、行為者本人に責が帰されると考えられるだろう。

よい行いをしている人は報われ、悪い人は罰させるべきであると考えられるなら、何らかの事由が生じた場合、その行いの当事者、加害者が元来良い人であった場合と悪い人であった場合には、同じ罪あるいは規範逸脱を犯していてもその処遇に差をつけてしまうことが予測されよう。これは本来の

法の原理からは反することで当該の事件における責任のみを持って、その罪や量刑は判断されるべきである。それ以外の要因を加味して判断を相手によって変えてしまうのは公正さに反する。したがって、公正さを重視する人にあってはこうした相手を見て責任の程度を左右するような判断を差し控えるものと考えられる。

道徳基盤理論では、人々の感じ、考える道徳観の基盤として、公正さ以外に、人を傷つけないこと（ケアの基盤）、内集団・仲間の意に従い裏切らないこと（忠誠さの基盤）、権威者に従うこと（権威の基盤）、清浄さの規範に従い、汚染や穢れを避けること（清浄さの基盤）の５つの基盤を提示した（Haidt, 2013）。彼らはこうした基盤を個々人がいずれを特に重視するかを測定する MFQ を制作し、実証研究に用いている。その一方、日本において MFQ を用いて評定結果を因子分析しても５因子がうまく抽出されないという問題点も見受けられる。本論文では副次的な目的としてこの MFQ 日本語版についても改善を目指すことにする。

さて、５つの基盤のうち、公正さに重きを置かないものは、むしろ公正世界観に従い、良い者への罰を控えめにし、悪い者への罰を強化してしまうものと予測できる。そこで、本研究では、事件を示すシナリオに加害者のふだんの振る舞いや性格などの状況を加え、それが良い場合と悪い場合とでいかに異なる評定結果を生じさせるかを実験参加者個人の公正を重んじる程度によって調べることを計画した。

実験計画の概要は以下である。実験参加者は事件のシナリオとその加害者のふだんの振る舞い、性格についての情報を与えられ、責任帰属についてのいくつかの質問項目に回答する。評定後に、公正世界観尺度と道徳基盤尺度に回答する。事件は２種類用意し、実験参加者は２個の事件について、いずれも加害者が良い人である場合のシナリオかあるいは、いずれも悪い人であるかのシナリオのどちらかを読んで回答する。したがって良い人、悪い人は参加者間条件、２つのシナリオは参加者内条件となる。

仮説は以下となる。

仮説　改訂日本版 MFQ において、公正基盤を重視する傾向の低い参加者は高い参加者に比べて、加害者が良い人か悪い人かで異なった責任帰属を行う。

具体的には良い人の場合は責任の大きさをより小さく評定し、悪い人の場合には責任の大きさをより大きく評定する傾向を示し、良い人と悪い人との間に有意差を生じるであろう。公正基盤を重視する者においてはそのような周辺情報によって異なる責任帰属はしないだろう。

方　　法

参加者　79名（男性：21名、女性：58名　平均年齢：20.75歳）

よい人物条件が、38名、悪い人物条件が、41名であった。

シナリオ　規範逸脱場面を構成する２つのシナリオを用意した。１つは交通事故、１つは不倫を題材にして、描かれた事情のなかで責任について他の人物も関与したと考えられる余地があること、状況についての原因帰属できるような余地を含めるように用意をした。

条件　規範逸脱を行う人物の日頃からの行いが「良い人物」である場合と相対的に「悪い人物」である場合を条件として設定した。参加者間条件である。以下、シナリオと共に示す。 カッコ内において実験参加者は、いずれかの条件の記述に接することになった。

シナリオ１

ある日の夕方、フリーターの太郎さん（26才）が車を運転中に電柱にぶつかる事故を起こしてしまいました。アルバイトは休みの日でしたが、店長からの急な呼び出しで仕事先に向かう途中、エンジンが突然動かなくなり、事故は起こりました。 車は太郎さんの友人の持ち物でした。後で確認すると、その車は以前にも一度エンジントラブルで急に止まったことがありました。 しかし、その後は問題なく走行出来ていたため、友人は太郎さんにそのことを伝えていませんでした。またその日は、道路工事をしており、交通量が多い夕方に片側通行の制限をしていたため、渋滞が発生しいつもより到着時間が遅くなりそうでした。また事故現場の道路の白線は、消えたまま何年も放置され暗くなるとよく見えません。車が白線からはみ出しても分からない状態でした。太郎さんの性格は（１．穏やかで、運転はとても慎重にするタイプです。しかし、運転免許は１か月前に取得したばかりで、運転にはまだ不慣れでした。 ２．気性が荒く自己中心的で、運転も自分の判断だけでしてしまうタイプです。）

シナリオ２

花子さん（27才独身）は職場の先輩である次郎さんと交際をしています。しかし、次郎さんには家庭があります。彼は仕事が忙しく、平日は帰宅時間がとても遅くなり、休日出勤も多いです。このため、妻とはすれ違いの生活で、夫婦仲は冷え切っていました。花子さんは、仕事が出来る彼に以前から好意を寄せていました。しかしながら、彼には家庭があるので、花子さんは思いを秘めておこうと考えていました。ところがある日、思いがけず次郎さんから食事に誘われました。行くかどうか迷いましたが、友人に相談すると、彼の家庭の状況から、友人は行くことを勧めました。それから、悪いことだと分かっていながらも、何度か食事やデートを重ねています。花子さんの性格は（１．真面目で優しく、仕事はしっかりこなすタイプです。２．活発で社交性がありますが、仕事に関しては積極性が無く、いいかげんな所があるタイプです。）

手続き　授業時間を利用して質問紙を集団で配布して実施した。実験参加者は「良い人物」条件か「悪い人物」条件かのシナリオ１、２の２つ共をこの順序で示された。その後、帰属の質問に回答

し、個人差尺度に回答し、実験を終え、後の授業回においてデブリーフィングがなされた。

測度　外的帰属（友人、店長、不倫相手など他者への外的帰属および道路状況や職場環境などの状況に帰属させる質問を個々に設けた）を１―７の７点尺度で回答を求めた。

個人差変数　鈴木・木野（2008）の多次元共感性尺度（MES）、金井（2013）の道徳基盤尺度（MFQ）の北村による改訂版（改訂日本版 MFQ と称する）、村山・三浦（2013）の公正世界信念尺度を施行した。さらに、著者の新たに作成した恨みにまつわる応報的な尺度（「人から恨まれると何か悪いことが起こる」「自分が人を恨むとその相手は不運に見舞われる」「自分の思いは相手の運命に影響する」「相手を恨めば、いつか自分も恨まれる」）の４項目（「恨み応報尺度」と称する）も加えて測定を行った。

結　　果

改訂日本版 MFQ について因子分析を行った。原版に倣い、５因子として主因子法・プロマックス回転によって因子負荷量を得た（表１）。結果として、Haidt が提案していたような５つにわかれず、全基盤を通じて悪い事をしない良心とでもいうべき項目群を第１因子とし、社会的な要素を加味した忠誠・仲間を中心とする第２因子、次にケアと公正を混合させた第３因子、権威を中心とした一部清浄さを伝統として取り入れたような第４因子、他者への関係的配慮についての第５因子と分かれ、清浄さについては独自の因子を持たなかった。これは日本的な清浄さ、穢れに焦点をあてて項目がつくられていないとも言え、今後の課題となろう。たぶんにこうした MFQ の因子分析結果が安定していないかもしれない懸念も含めて今回はこうしたひとつの結果を提示するにとどめ、本研究では公正さの知覚や重視が他者への責任帰属でいかに働くかに着目しているため、MFQ の従来公正基盤とされていた項目における合計値を算出し（$\alpha = .642$）、中央値分割によりその高低群を分けて検討を行うこととした[1]。

公正基盤得点22点以上の上位35名を公正基盤高群、21点以下の43名を公正基盤低群とした（欠損値１名）。

次に、それぞれの帰属を問う尺度項目について、「良い人物」条件、「悪い人物」条件毎に平均値を算出した結果を表２に示した。個人差変数を考慮せずにこの群間だけで独立した t 検定（片側）を行ったところ、シナリオ１の本人に対する帰属において、良い人物の方が責任を免除される方向に、シナリオ２における職場環境という状況要因について良い人物の方が状況が勘案される方向に５％水準で有意差が見られた（順に、$t(77) = -1.76, p < .05; t(77) = 1.72, p < .05$）。

さらに、公正基盤重視などの個人差要因の効果を検討に含めるために、２（人物：良い vs 悪い）×２（公正基盤：高 vs 低）×２（帰属：内的 vs 外的）の３要因分散分析を責任の大きさ指標に対して行った。最後のみ参加者内要因である。従属変数の責任を大きさは表２にある本人原因を内的帰

表１　改訂日本版道徳基盤尺度の因子分析結果

			Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
良心	22	悪い行いよりは、良い行いをしたほうがよいに決まっている	**0.716**	−0.047	0.060	−0.254	0.156
	27	自然や環境を痛めるような行動は間違っている	**0.673**	0.117	−0.069	−0.070	0.012
	24	公正とは社会にとって、必要とされる大切なものだ	**0.645**	0.068	0.110	0.081	−0.306
	21	たとえ誰も傷つかないとしても、不快極まるような行動をとるべきではない	**0.621**	−0.060	−0.010	−0.085	0.091
	23	無防備な動物を傷つけることは、人間として最低な行動だ	**0.587**	0.028	−0.111	−0.140	0.036
	32	身をきれいに保つことは重要で価値のある道徳的美点だ	**0.544**	−0.071	0.023	0.204	0.006
	28	人間を殺すことは、どのような状況においても正当化できない	**0.494**	−0.034	−0.259	0.107	0.265
忠誠	11	気持ちの悪くなるようなことをしたかどうか	0.128	**0.776**	−0.059	0.019	−0.193
秩序	12	その人が残虐であったかどうか	−0.100	**0.723**	−0.013	−0.089	−0.077
悪徳でないこと	15	ある行動によって、混乱や無秩序が生じたかどうか	0.051	**0.701**	0.021	−0.123	0.045
	14	その人の行動が忠誠心に欠けていたかどうか	−0.005	**0.643**	0.120	0.233	0.036
	9	自分の所属する集団に対する裏切り行為があったかどうか	−0.068	**0.611**	0.083	0.038	−0.050
	10	社会の伝統的なしきたりや慣習に従っていたかどうか	−0.030	**0.500**	0.067	0.264	0.026
	3	仲間のことを考えて行動をしたかどうか	0.024	**0.474**	0.091	0.027	0.087
ケア	5	純粋さやきちんとしていることの普通の基準に反しているかどうか	−0.120	0.028	**0.592**	0.049	0.159
公平	7	弱い人や傷つきやすい人に対する配慮があったかどうか	−0.040	0.030	**0.583**	0.053	−0.052
やさしさ	8	不公平な行動をとっていたかどうか	−0.080	0.179	**0.533**	−0.193	−0.083
	18	政府が法律を作る際、一番重要視されるべきことは、すべての人が公平な扱いをうけることだ	0.421	0.004	**0.492**	0.120	−0.197
	4	権威のある人に対する敬意が欠けていたかどうか	−0.229	0.111	**0.453**	0.269	0.303
	17	苦しんでいる人や困っている人への思いやりの念とは最大の美徳である	0.165	0.009	**0.398**	0.199	0.179
	1	誰かが精神的に傷ついたかどうか	0.113	0.113	**0.326**	−0.239	0.281

伝統	**20**	子供たちは皆、権威を尊敬することの大切さを教わるべきだ	0.127	−0.066	0.141	**0.576**	0.079
権威	**16**	神仏を汚すような行動をしたかどうか	−0.131	0.212	0.085	**0.466**	0.075
	19	私は自分の国の歴史を誇りに思う	0.242	−0.175	0.175	**0.422**	−0.082
他者関係配慮	**30**	自己主張することよりも、チームのために働くことのほうが重要である	0.284	0.129	−0.104	0.097	**0.455**
	29	裕福な家庭に生まれた子供が、たくさんのお金を相続し、貧乏な家庭の子供は何も相続しないというのは、道義に反すると思う	−0.054	0.184	−0.197	0.204	**0.381**
	2	一部の人々が他とは違う扱いを受けていたかどうか	0.130	−0.010	0.130	−0.331	**0.365**

※主因子法・プロマックス回転による

表２　帰属の条件毎、測度毎の責任帰属の平均値

	「良い人物」（n ＝38）		「悪い人物」（n ＝41）		
帰属対象	**平均値**	**SD**	**平均値**	**SD**	
本人	4.03	1.88	4.71	1.55	＊
友人（外的）	4.68	1.53	4.85	1.26	
店長（外的）	2.03	1.39	1.93	1.27	
道路工事（状況）	2.39	1.64	2.51	1.78	
白線（状況）	4.89	1.61	5.12	1.62	
本人	5.18	1.54	5.12	1.47	
次郎（外的）	6.21	1.17	5.88	1.62	
友人（外的）	4.45	1.50	4.07	1.82	
妻（外的）	2.63	1.55	2.63	1.43	
職場環境（状況）	2.92	1.94	2.22	1.68	＊

＊ $p < .05$

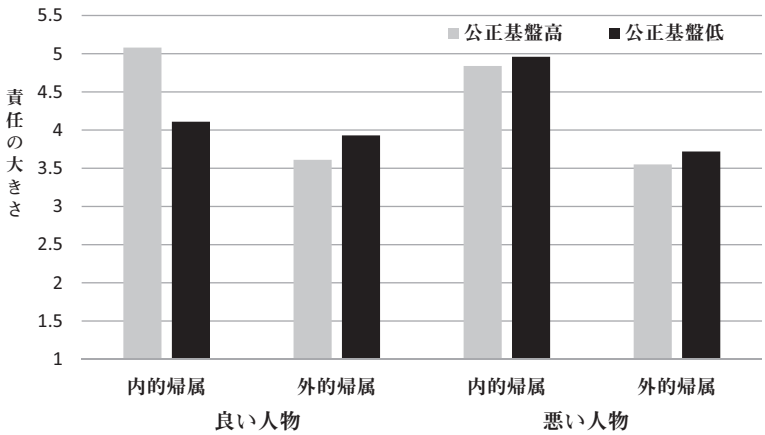

図１　人物、帰属、公正基盤高低による責任評定

属、それ以外の他者や状況を合計、平均して外的帰属の値とした。その結果、帰属の主効果の他、3要因交互作用が有意であり（図1：順に、$F(1, 73) = 56.88, p < .001; F(1, 73) = 4.70, p < .04$）、公正基盤の高群では内的帰属、外的帰属のありようが良い人物と悪い人物とで変わらないのに対して、公正基盤低群では、悪い人物において特に内的帰属（本人のせいだと考える）が高く、良い人物では内的責任帰属が割り引かれることが示された。

公正基盤に変えて、公正世界信念の内在的公正世界信念を高低群として加えた分析を行ったところ、やはり3要因交互作用が見だされ、同様の傾向が示された。ただそれは、内在的信念が強いほど因果応報的志向性が高いので、悪い事をした人物本人をより責める傾向が見られ、信念の弱い場合の方が、良い人物／悪い人物で差をつけないという結果であった。

本研究では、人物の描写が良い人物と悪い人物の2パタンがあり、実験状況として刺激の違いがあるために、全体での相関は多く重視はせずに捉えるが、「人から恨まれると何か悪いことが起こる」という恨み相応尺度の結果では、内在的公正観や究極的公正観と正相関を持ち（順に、$r = .291, p < .05$; $r = .400, p < .01$）、また改訂MFQの他者関係配慮因子（他者を気にする）とも有意に正相関することから（$r = .261, p < .05$）、因果応報的な思考ないしはその怖れから他者との協調を図ろうとする動機の一部が説明され得ることを示唆するものと考えられる。また恨み相応尺度得点の高い者は第1シナリオの店長や第2シナリオの友人など、事象に関連はしているが必ずしも直接責任が追求される立場ではない第3者的関与人物に対する責任帰属が高い傾向を示しており、事象に間接的に関与した者にも恨みを抱きやすい特別の傾向が示唆された。

考　　察

本研究では、道徳基盤の重視の仕方や公正世界信念などの個人差によって、事件とは直接関係のない加害者の普段の行い情報からある意味不公正な責任帰属についていかに異なった推論を行うかを検討した。公正さを相対的にあまり重視しない者は、加害者の事件以前の普段の行いが良い場合は罪を割り引き、悪い人物に対しては厳しく罪を問うという傾向が示された。これらの結果は、裁判員の量刑判断などにおいても参考になる知見と考えられる。ただ、この結果から必ずしも非常に不公正な判断であったと断定することはできないかもしれない。今回用意したシナリオでは事件が生じた意図があいまいにされているため、実際に罪の場合には量刑判断にも関わる動機や意図性について判断材料が十分でないからである。普段から乱暴な運転をしている者は事故の可能性を軽視し、警戒を怠った運転をしているかもしれない。そうした者の場合は再犯可能性にあたる繰り返し同様の失敗を犯しがちであると予測され、更生や態度変化のためにも罪に対して厳しく当たらなければならないと考える場合もあろう。自動車事故であれば、善良な人は本当に不運なことにうっかりして、急いでいて、白線が見えにくかったからなどの状況要因によって事故が生じた可能性が考えられるかもしれない（し

かしながら事故を起こしてはよくない)。

したがってどういった判断が本来正しいかを本論文で強く主張することはこのシナリオに基づく限り困難であるが、公正さを重視する者とそうでない者とで責任帰属のありかたが異なった事実は結果として現われた。公正さを重視する者たちは、良い人物条件と悪い人物条件でそれほど帰属のしかた、責任の問い方に違いを見せなかったのである。

これらの者たちにおいては何かしら人物以外の部分での責任帰属の問い方の一貫性を支える根拠があるものと推察できるか、本研究では公正基盤の重視のありかたと、内在的公正世界信念にとらわれないといった個人差以外の点ではそれらの判断を支える根拠や内的プロセスを詳細には解き明かすことができなかった。さらに内的な態度形成や信念形成の仕組みとして、公正世界信念と道徳基盤との間でどういった関係があるのかについても今後さらに検討が進められなければならないだろう。

道徳基盤については、因子分析の結果、Haidt が想定するような 5 つの道徳基盤には分かれなかった。これらの項目は、日本で見られる道徳観とうまく適合しないものもある。日本版の MFQ はさらに改訂の余地があるものと考えられ、今回の因子のまとまり方はひとつの示唆となり、どういった種類、カテゴリーで道徳基盤を考えていくべきかについてまださらに検討の余地が大きく残されていることを示しているだろう。MFQ の改訂はひとつの課題である。

最後に、人を責める現象に関与すると思われる恨み応報尺度も取り入れて検討したことに触れる。恨みが観念だけでなく、実際に他者に実害を与えるという信念はひとつの「宗教心」とも言える。物理的因果則ではない超常現象に近いものであるが、人はそれなりにこれを信じている場合があり、その根拠とも言えるのが因果応報の考え方である。この世で実際因果応報が正しくよく働いていれば、悪い事をしたらいわゆる「罰があたる」ということで罰を受けるわけである。内在的公正信念とも相関を示したが、恨み応報は究極的公正世界信念とより大きな（中程度の）正相関を示した。現時点の世界で応報が正しく対応していなくても「いつかそうなる」という思いの方が「恨み応報」においてもより妄想的、想像的な世界での辻褄としてこの対応性、応報性は成立するものであるとの思いが共通して両指標には包含されているものと解釈できよう。こうした恨みに関する考え方への親和性は、日本古来からある御霊信仰とも関与すると考えられ、強い恨みを持って亡くなった者は死後においても力を持ち、その霊力によって災害や天災を惹き起こしたり、世のなかに悪影響を与えたりするものと中世までは強く信じられていた。恨みをとくことが重要であるから、それを祀ることによって鎮めるという宗教行為が生まれ、保持されてきた歴史的経緯がある（山田，2014)。今後こうした信念に文化差のあることを尺度を構成しつつ検討を重ねていく必要があろう（北村・小林，審査中)。

恨みに限らず、道徳、公正観は感情成分とも強く関与し、感情由来の直観的道徳というアイデアが Haidt（2001）の新たに導入され、注目された捉え方であった。道徳基盤のネガティブな側面がどういったネガティブ情動に牽引されて実際の世の中で発現しやすいのかまだ検討が十分進められていない。公正に関与する憤り、義憤などは第 3 者感情として興味深いものである。またフリーライダーに対する処罰感情も公正の維持には重要である。一方、分配の公正さは、社会的支配志向（SDO）な

どの個人差によって同じ状況でも持ち得る感情がかなり異なってくることも想定される。道徳と感情のつながりについてもこうした個人差を加味しながら検討を進めていくことが有望に思われる。本研究で暫定的に日本語版 MFQ の改訂版も試作した。さらに使いやすいバージョンを今後も模索予定であるが、新たな因子構成で他の尺度との関連を探ることも意味のあることと考えられる。

引用文献

Callan, M.J., Sutton, R.M., & Dovale, C.（2010）. When deserving translates into causing: The effect of cognitive load on immanent justice reasoning. *Journal of Experimental Social Psychology, 46*, 1097−1100.

Haidt, J.（2001）. The emotional dog and its rational tail: A social intuitionist approach to moral judgment. *Psychological Review, 108*, 814−834.

Haidt, J.（2013）. Moral foundation theory: On the pragmatic validity of moral pluralism. In P.Devine & A. Plant（Eds.）, *Advances in experimental social psychology*（Vol. 47, pp.55−130）. San Diego, CA: Academic Press.

金井良太（2013）．脳に刻まれたモラルの起源：人はなぜ善を求めるのか　岩波書店

北村英哉・小林麻衣（審査中）恨み忌避感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討―協調性、信頼、拒否不安との関連―

Lerner, M.J.（1980）. *The belief in a just world: A fundamental delusion*. New York: Plenum.

村山 綾・三浦麻子（2015）．被害者非難と加害者の非人間化― 2 種類の公正世界信念との関連―　心理学研究, *86*, 1－9 .

鈴木有美・木野和代（2008）．多次元共感性尺度（MES）の作成―自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて　教育心理学研究, *56*, 487−497.

山田雄司（2014）．怨霊とは何か―菅原道真・平将門・崇徳院　中央公論新社

注

注１　ケア／公正／やさしさで合計しても $\alpha = .632$であり、この変数の高低群（23点以下38名低群と24点以上39名高群）に入れ替えて３要因分散分析を行うと３要因の交互作用は有意でなく、人物の条件と内外帰属の２要因交互作用の傾向が見られた（$F(1, 73) = 3.359$, $p < .08$）。ケアややさしさの感情が混じるような場合では公平な帰属が保たれるわけではないことが示唆される。

謝辞

本研究は、科学研究費基盤研究（B）研究代表者：唐沢穣『道徳意識の生成・共有・創発過程：個人と文化の動態的関係の解明』（15H03446）の助成を受けて行われた。調査の実施に携わった関西大学社会学部平成28年度卒業生岸本裕喜氏に謝意を表する。岸本氏の卒業論文のデータと共通のデータを用いているが分析変数の投入やそれに基づく新たな分析を加えた結果によって本研究は構成されている。

【Abstract】

Effects of Moral Foundations and Belief in a Just World on Responsibility Attribution

Hideya KITAMURA

According to Just World Theory, good people deserve reward, while bad people would suffer from bad events. In this study, to investigate whether good or bad character information has an impact on the judgment of responsibility of two vignettes describing bad events, seventy-nine participants read vignettes and responded to the items related to causal attribution. Furthermore, the relationship of moral foundations and just world belief with the judgments was tested. In the results, participants in low score on the fairness foundation showed more discrepancy between good target and bad target in dispositional attribution. In bad target condition, low fairness group attributed causation of bad accidents more to the target persons. While high fairness group responded almost the same way whether the target person was good or bad. And resentment scale was found to correlate with immanent justice significantly. The relation of moral and resentment would be discussed.

Key words: moral foundations, belief in a just world, attribution, responsibility, resentment